

「有坂秀世博士略年譜稿」について

『國語學』第十輯（昭和二十七年九月）の「有坂博士追悼録」では「有坂秀世博士略年譜」（八七一—八八頁）、「有坂秀世博士著作論文年表」（八八一—九〇頁）があり、『上代音韻攷』でも「有坂秀世博士略年譜」（七四一—七四二頁）、「有坂秀世博士著作論文目録」（七四三—七四六頁）に分れている。それもまた一法であるけれども、闘病生活を送って社会と交渉の少なかつた有坂氏は、研究、執筆だけが全生活であったともいえ、研究、執筆と生活とが密接に関連づけられている略年譜の方が、その姿を正しく理解できるのではないか、と私は考えている。従って、この略年譜は、履歴、生活、研究、執筆等を一括した年譜である。そのさい、刊行された論著は、これを二字下げて記すことにした。その年月（日）は、公称の発行日であって、じっさいには前後することがあるかもしれない。たとえば、『國語と國文學』第十一



巻第一号（「古代日本語に於ける音節結合の法則」を掲載する。）には、昭和九年一月一日発行と記されているが、東京都立大学に所蔵される同誌には上に掲げた印があつて、じっさいには前年中に発行されていたことがわかる。しかし、今日、一々についてじっさいの発行日を検することは不可能であるから、印刷された公称の発行日に従うことにする。

私の作成した年譜は、まだまだ粗雑なものであり、府立一中時代のこと、一高時代の病歴、東大時代のことなど、今後検討を重ねることにして掲載しなかつた事項もある。近い将来、改訂増補したいと思うので、「略年譜稿」と称することにした。

なお、敬称は、一切省略した。

有坂秀世博士略年譜稿

明治41年9月5日

広島県呉市大字莊山田村字三番町二丁目七十三番地に有坂鉦藏、敏子の五男として生まる。このとき、父、鉦藏は海軍造

兵中監（海軍中佐相当の技術科士官）として呉海軍工廠造兵部長心得の職にあり、かつ、明治35年2月6日以降、東京帝国大学工科大学教授を兼任し、造兵学第二講座を分担。工学博士。母、敏子は海軍造兵総監前田亨の二女。

〃 42年10月11日 父、任海軍造兵大監（海軍大佐相当官）。
 〃 44年1月 東京市本郷区駒込曙町十三番地はノ六号に転居。

〃 44年3月10日 妹花子（二女）出生。

〃 44年6月27日 父、造兵監督官として渡英。

〃 44年10月5日 祖父前田亨逝去（満七十歳）。

〃 44年12月4日 父、帰朝。

〃 45年7月 東京府荏原郡玉川村大字瀬田字下ノ原千五拾六番地に転居。

大正3年4月27日 妹雪子（三女）出生。

〃 4年4月8日 学習院初等学科入学。

〃 4年11月1日 父、補海軍造兵廠長。

〃 4年12月13日 父、任海軍造兵総監（高等官二等、海軍少将相当官）。

〃 5年10月29日 妹須磨子（四女）出生。

〃 8年5月28日 兄光威（二男）、陸軍士官学校卒業（大正

8年5月30日付『官報』第二〇四号）。

〃 8年9月22日 父、海軍造兵少将（改称）。

〃 9年12月1日 父、任海軍造兵中将。

〃 10年3月26日 東京府立第一中学校入試受験、倍率八、四。

大正10年3月31日

学習院初等学科卒業、同級生に山崎不二夫、多賀宗隼等がいる。三等褒状を受く。府立一中合格者発表。

// 10年4月2日

東京府立第一中学校入学、一年丁組所属。同学年に大林清、小原孝夫、川喜田愛郎、切替一郎、崎川範行、重松鷹泰、西尾光雄、古屋亨等がいる。

// 11年2月4日

第八回校内弁論大会に「英語暗誦」で出場、「Pleasing everybody」により受賞。

以後、第二、三学年に「委員」、第四学年に「會幹」として、弁論部役員に任ぜらる。

// 11年4月4日

二年乙組所属。第一学期、級長に任ぜらる。

// 11年9月1日

第二学期、級長に任ぜらる。

// 12年3月31日

父、予備役編入。

// 12年4月2日

三年丙組所属。第一学期、級長に任ぜらる。

// 12年4月5日

父、任東京帝国大学教授（専任）。

// 12年7月14日

兄磐雄（三男）、海軍兵学校卒業。

// 12年9月1日

第二学期、級長に任ぜらる。関東大震災。

// 12年9月2日

東京府荏原郡駒沢村大字上馬引沢八拾四番地ノ一（昭和7年10月1日、東京市世田谷区三軒茶屋町八拾四番地ノ一と更正。）に転居。

// 12年

「私ノ国語音声学ノ組織」をとりまとめる。

// 13年1月8日

第三学期、級長に任ぜらる。

// 13年4月1日

四年甲組所属。第一学期、級長に任ぜらる。

// 13年

「私ノ国語音声学」の全組織に訂正を加える。

// 14年3月31日

東京府立第一中学校第四学年修了。

// 14年4月16日

第一高等学校文科乙類入学。文乙三十五名中、二十一番（大正14年4月14日付『官報』第三七九〇号）。同学年の文甲に服部四郎、松尾聰、古屋亨、文乙に下田弘、橋本文夫、文丙に下田武三、理甲に切替一郎、山崎不二夫、理乙に重松鷹泰、川喜田愛郎、藤田良雄等がいる。

入寮して、山崎不二夫、藤田良雄と同室になる（東寮第五番室）。以後、ときどきに藤田の福井方言を観察して記録。

大正14年8月21日 父、東京帝国大学退官。

〃 15年初 小論文「Accentus」を書く。

〃 15年6月29日 父、東京帝国大学名誉教授となる。

〃 15年9月初 行阿『仮名文字づかひ』、契沖『和字正

濫鈔』、『和字正濫要略』を読んでアクセントの問題に興味をもつ。

〃 15年9月下旬 肺結核になって退寮、約一ヶ月半欠席。

〃 15年12月 〃 11月 Helmholtz "Sensations of Tone." (Elias 訳)を読みはじめる。官長等の著書にみ

えるアクセントの記述を級友(文乙)の三重県人、松浦享二(三重県立富田中学

四修)、藤田保(三重県立富田中学卒)によって確認。

〃 15年(?) 父、仏人経営のレール・リキード(液体

空気)社の顧問となる。

昭和2年2月 論文「音の強さと大きさ」(初稿)。

〃 2年3月末 「気分ノ激変ノタメニ、人生ノ一切ト将来トニ対スル執着ヲ失ヒ、研究ニ対スル興味モ冷却シ去ツテシマッタ。」神経衰弱か。東大病院で診療。後に森田正馬医師の療法に従う。

〃 2年4月〜6月 「或水曜日ノ十分ノ休ミ時間ニ、……

『ふね』『ふなびと』『あめ』『あまがさ』

ノヤウナ対ニアラハレル母音ノ変化ト、

あくせんとトノ間ニ何カ關係ガアリハシ

ナイカ」と思いつき、研究を再開。

〃 2年7月上旬 夏休み直前、藤田保に安藤正次著『小さい国語学』中の単語につき、三重県方言のアクセントを教えてもらう。

〃 2年7月中旬 〃 8月末 論文「音の強さと大きさ」(再稿)、「東京のアクセント」を書く。

〃 2年7月中旬 〃 8月末 兄愛彦(四男)と東北地方に方言調査の旅に出る(四、五日間)。

〃 2年10月半ば 〃 3年3月19日 「語勢沿革研究」(ノート)を書きあげる。

〃 3年3月31日 第一高等学校文科乙類卒業。文乙三十九

名中、二番(昭和3年4月19日付『官報』第三九〇号)。

〃 3年4月1日 東京帝国大学文学部言語学科入学。

〃 3年11月30日 会員名簿登載(音聲學協會會報第11

〃 5年3月31日 兄愛彦、東京帝国大学文学部美学美術史

〃 5年8月8日 父、帝国酸素株式会社社長(初代)に就

〃 5年8月8日 父、帝国酸素株式会社社長(初代)に就

〃 5年8月8日 父、帝国酸素株式会社社長(初代)に就

- 昭和5年12月 卒業論文「奈良朝時代に於ける國語の音韻組織について」を提出。
- // 5年(?) このころ、兄磐雄、多重放送受信回路を考案、愛彦名義で特許取得。
- // 6年3月31日 東京帝国大学文学部言語学科卒業。言語学科の同期に服部四郎、池田徳貞、大嶋功等がいる。
- // 6年4月 東京帝国大学大学院進学。
- // 6年5月 「國語にあらはれる一種の母音交替について」を書きあげる。
- // 6年8月24日 神奈川県鎌倉郡腰越町七八九番地の鈴木療養所に肺結核で入所。院長鈴木孝之助(海軍軍医中将)、主治医は副院長池田三雄。
- // 6年9月25日 *Vokalharmonie* の概念について
音聲學協會報第24號
- // 6年12月16日 音聲の認識について 音聲の研究第IV輯1—11頁。
- // 6年12月16日 國語にあらはれる一種の母音交替について 同右89—107頁。
- // 7年4月25日 音聲の「強さ」と「大きさ」とについて
- // 7年6月1日 「拙稿『音聲の認識について』に對する訂正」を書く。
- // 7年7月10日 鈴木療養所退所。東京府荏原郡駒沢町上馬八十四番地(10月1日東京市世田谷区三軒茶屋町八十四番地と更正。)に居住。
- // 7年8月1日 「古事記に於けるその假名の用法について」を書きあげる。
- // 7年8月3日 兄愛彦、著音機「クレモナ」を考案して特許を取得、神林工業より発売すること
で公正証書作成。
- // 7年8月17日 「音の『變化』の概念について」を書く。
- // 7年11月1日 古事記に於けるその假名の用法について 國語と國文學第九卷第十一號
- // 7年12月10日 拙稿「音聲の認識について」に對する訂正 音聲の研究第V輯
- // 8年5月1日 下二段活用の補助動詞「たまふ」の源流について 國語と國文學第十卷第五號
- // 8年5月25日 音の「變化」の概念について 音聲學協會報第29—30號
- // 8年7月1日 鈴木療養所再入所。

- 昭和8年9月19日 「不可能を意味する『知らず』について」
を書きあげる。
- 〃 8年9月ごろ 服部四郎病床訪問。
- 〃 8年8月(?) 〃
12月31日以前 『上代音韻攷』の「第三部 奈良朝
時代に於ける國語の音韻組織について」
の原稿のほとんど二千枚余(二百字詰)
を病床で書きあげる。
- 〃 9年1月1日 古代日本語に於ける音節結合の法則
國語と國文學第十一卷第一號
- 〃 9年1月4日 「Phoneme について」を書く。
- 〃 9年3月26日 兄磐雄、海軍委託学生として東北帝國大
学工学部電気工学科を卒業。
- 〃 9年5月30日 Phoneme について 音聲學協會會
報第33號
- 〃 9年9月1日 「わする」の古活用について 方言
第四卷・第九號
- 〃 9年9月20日 母音交替の法則について 音聲學協
會會報第34號
- 〃 9年12月31日 以後約半年にわたり安嶺屯生まれの医
学生潘明海の言語を観察、調査。
- 〃 10年1月5日 音韻に関する卓見 音聲學協會會報
第35號
- 〃 10年2月15日 金田一京助あてに92枚の手紙(「有坂秀
吉氏音韻論手簡」)を書きあげる。これ
以前に「音韻變化について」の原稿を後
藤興善あて送る。(昭和10年11月以降、
雑誌『コトバ』に連載さる。)
- 〃 10年2月ごろ 一日二回二十分ずつの散歩を許されるよ
うになる。
- 〃 10年3月1日 奈良朝時代東國方言のチ・ツについ
て 方言第五卷・第三號
- 〃 10年4月21日 東京牛込の「いのち」之友社において、
上村邦良牧師より洗礼を受ける(信愛教
会記録)。
- 〃 10年5月1日 下二段活用の補助動詞「たまふ」の
源流について 國語と國文學第十二
卷第五號
- 〃 10年5月25日 「音韻に関する卓見」中の用語の訂
正 音聲學協會會報第36號
- 〃 10年7月1日 萬葉假名雜考 國語研究第三卷第七
號
- 〃 10年8月1日 ソの萬葉假名について 國語と國文
學第十二卷第八號
- 〃 10年8月末 「音韻論」を『音聲の研究』第VI輯の原

稿として音聲學協會へ送る。

昭和10年10月1日

音韻體系の理想と現實 方言第五

11年2月1日

卷・第十號

10年10月末

鈴木療養所退所。東京市世田谷区三軒茶

11年3月10日

屋町八十四番地に居住。

10年11月1日

音韻變化について(一) コトバ第五

11年4月1日

卷第十號

10年12月1日

音韻變化について(二) コトバ第五

11年4月1日

卷第十一號

10年12月15日

不可能を意味する「知らず」につい

11年4月1日

て 藤岡博士 言語學論文集 岩波書店

11年1月1日

上代に於けるサ行の頭音 國語と國

11年4月25日

文學第十三卷第一號

11年1月1日

音韻變化について(三) コトバ第六

11年4月25日

卷第一號

11年1月1日

隋代の支那方言 方言第六卷・第一

11年5月1日

號

11年1月1日

奈良朝以前の國語に於ける撥音の存

11年5月1日

否 國語研究第四卷第一號

11年1月31日

國語の「ス」の母音と支那語の「四」

11年5月1日

の母音 音聲學協會報第40號

11年2月1日

音韻變化について(四) コトバ第六

11年6月1日

卷第二號

遼部について 國語研究第四卷第二

號

音韻變化について(五) コトバ第六

卷第三號

音韻變化について(六) コトバ第六

卷第四號

漢字の朝鮮音について(七) 方言第六

卷・第四號

カムカゼ(神風)のムについて 國

語研究第四卷第四號

入聲韻尾消失の過程 音聲學協會會

報第41號5—7頁

悉曇藏所傳の四聲について 同右8

—10&4頁

菊澤季生氏著「國語音韻論」 國語

と國文學第十三卷第五號

音韻變化について(七) コトバ第六

卷第五號

漢字の朝鮮音について(八) 方言第六

卷・第五號

「うちやめこせね」に就いて

- 國文學解釋と鑑賞創刊號
 昭和11年8月初 父母と伊豆を旅行する。
 // 11年10月1日 「語根」の概念について 國語と國文學第十三卷第十號
 // 11年11月 「山東系の一方音について」を書きあげる。
 // 11年12月1日 意義の區別と音韻 コトバ第六卷第十三號
 // 12年1月1日 新撰字鏡に於けるコノ假名の用法 國語と國文學第十四卷第一號
 // 12年1月1日 山東系の一方音について 方言第七卷・第一號
 // 12年1月25日 音韻論 音聲の研究第六輯
 // 12年1月 上代に於ける特殊な假名遣 國語知識一月號
 // 12年3月24日 音聲學協會第39回研究會（於東大山上會議所）で「唐音の研究法について」を講演。
 // 12年4月1日 古音推定の資料としての音相通例の價值 コトバ第七卷・第四號
 // 12年5月1日 祝詞宣命の訓義に関する考證 國語と國文學第十四卷第五號
- 古音推定の資料としての音相通例の價值(中) コトバ第七卷・第五號
 // 12年5月1日 音聲學協會第40回研究會（於東大山上會議所）に出席。井桁貞敏「原始印歐語に於ける方言の問題」、神保格「生きた言葉の音聲の諸相」。
 // 12年5月6日 音聲學協會第40回研究會（於東大山上會議所）に於ける方言の問題、神保格「生きた言葉の音聲の諸相」。
 // 12年6月1日 古音推定の資料としての音相通例の價值(下) コトバ第七卷・第六號
 // 12年6月15日 唐音に反映したチ・ツの音價 音聲學協會報第47號
 // 12年11月30日 カールグレン氏の拗音説を評す(一) 音聲學協會報第49號
 // 12年11月30日 「東京市世田谷區新町一、106」に住所変更の通知(音聲學協會報第49號)。
 昭和10年～昭和12年 The Phonetic System of Ancient Japanese By S. Yoshitake, (Reviews of Books) Bulletin of the School of Oriental Studies, Vol. Ⅳ: 1935—37.
 昭和13年1月1日 「金有等麻字之多麻散禮」について 國語と國文學第十五卷第一號

- 昭和13年3月28日
カールグレン氏の拗音説を評す(一)
音聲學協會報第51號
- // 13年7月14日
カールグレン氏の拗音説を評す(二)
音聲學協會報第53號
- // 13年10月1日
江戸時代中頃に於けるハの頭音につ
いて 國語と國文學第十五卷第十號
- // 13年12月
東京市世田谷区三軒茶屋町二七に転居。
大正大学専任講師を囑託され、「國語學
史概説」(文学部)、「國語學史」(専門部
高等師範科)の共通授業を火曜日の第
5・6時(1時~3時)に担当すること
になる。俸給月額二十四円。
- // 14年4月20日
韻經の唐音に反映した鎌倉時代の音
韻状態 言語研究第二號
- // 14年6月30日
専門部高等師範科「國語學史」の「授業
経過報告」(第1學期)を提出。
- // 14年7月18日
カールグレン氏の拗音説を評す(四)
音聲學協會報第58號
- // 14年10月ごろ
大正大学専門部高等師範科三学会幹事の
宇井浩道、『三學會』誌の原稿を依頼。
- // 14年11月
「萬葉集に於ける漸々の訓その他」を書
きあげる。
- // 14年11月9日
大正大学教員に採用したき旨、仏教々育
財団理事長里見達雄より文部大臣河原田
稼吉に申請。
- // 14年12月9日
右、認可さる。
- // 14年12月16日
専門部高等師範科「國語學史」の「授業
経過報告」(第2學期)を提出。
- // 14年12月23日
萬葉集に於ける漸々の訓その他 國
文視野第六輯
- // 14年12月27日
「國語ノ授業ヲ擔任セル教職員」として
教学局長官あて論文目錄を提出。
- // 15年1月1日
劣敗者の人生觀 三學會第十三號
- // 15年2月12日
父、『兵器考』(全四冊、雄山閣)により
学士院賞授賞正式決定。
- // 15年2月13日
大正大学からの帰路、氷雨にぬれて肋膜炎
となる。2月20日、2月27日の授業を
休講。
- // 15年2月28日
専門部高等師範科「國語學史」の「授業
経過報告」(第3學期)を提出。
- // 15年3月29日
先秦音の研究と拗音的要素の問題
音聲學協會報第60、61號
- // 15年3月
大正大学講師辞任を申し出る。
- // 15年4月2日
大正大学評議員会、有坂講師を解嘱せ

ず、十五年度休講のあつかいとする
ことを決定。4月1日付で文学部講師、専門
部高等師範科講師の辞令を交付。

昭和15年4月10日

唐音を辨ずる詞と韻目を諧誦する詞

(一) 國語研究第八卷第四號

// 15年5月14日

父の学士院賞授賞式に兄愛彦代理で出
席。

// 15年6月10日

唐音を辨ずる詞と韻目を諧誦する詞
(二) 國語研究第八卷第六號

// 15年6月17日

大正大学長加藤精神より文部省専門学務
局長あて提出の「教員ニ關スル調査報告
ノ件」に休講の専任講師として名簿登
載。(昭和十六年度、昭和十七年度も同
じ措置をとる。)

// 15年6月30日

膺牙喉音四等に於ける合口性の弱化
傾向について 音聲學協會會報第
62、63號

// 15年7月10日

唐音を辨ずる詞と韻目を諧誦する詞
(三) 國語研究第八卷第七號

// 15年8月1日

「申し賜へ」と申さく」について 國
語と國文學第十七卷第八號

// 15年10月1日

シル(知)とミル(轉)の考 國語

// 15年11月30日

と國文學第十七卷第十號
メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音
ならざるか 音聲學協會會報第64號

// 15年12月15日

『音韻論』三省堂

// 16年1月

兄磐雄、造兵監督官として渡米。

// 16年1月10日

萬葉集訓義雜考 國語研究第九卷第
一號

// 16年1月19日

父、腦溢血で逝去(満七十三歳)。その
後、世田谷区三軒茶屋町八四に移る。

// 16年2月16日

「いのち」之友社の壮年会、青年会連合
懇親会において、二時間にわたり著書
『音韻論』を概説する。

// 16年4月1日

假名遣改訂案について 文學第九卷
第四號

// 16年4月30日

アクセントの型の本質について 言
語研究第七・八號

// 16年5月10日

古言雜考(一) 國語研究第九卷第五
號

// 16年6月10日

古言雜考(二) 國語研究第九卷第六
號

// 16年6月20日

日本諸學振興委員會第二回國語國文學會
(於文部省)で「國語の長母音について」

を口頭発表。

昭和16年7月1日

「帽子」等の假名遣について 文學

第九卷第七號

17年2月6日

三省堂の社員、病床を訪問して、辞書のアクセントのしごとは金田一春彦またはほかの者に任すことを提案し、了解をとる。

16年7月8日

学位請求論文『音韻論』（三省堂刊）と

参考論文「アクセントの型の本質について」

（言語研究第七・八號）抜刷とを東京帝国大学に提出。（学位請求論文、参

考論文は、後に上野の国立国会図書館分

館に移管さる。）

17年7月17日

略血。『北の人』（金田一京助著、昭和十七年三月青磁社刊）受領の礼状を金田一京助あてに書く。

16年7月10日

金田一京助へ学位請求論文提出を報告する手紙を書く。

17年12月

明世堂主人3回来訪して、既発表の論文をまとめて出版したいと懇望。承諾を与える。

16年7月

病氣再発、熱の上昇急激。十日間ほどで七度台に落ちつく。

18年2月21日

学位請求論文の關係論文についての金田一京助よりの問いあわせに返事を書く。

16年8月

神奈川県三浦郡大楠町佐島海岸の西浦海浜療院に入院。院長兼主治医石川武雄。

18年2月24日

東京帝国大学文学部教授会で学位請求論文パス。

16年9月1日

音韻制度の本質について 國語と國文學第十八卷第九號

18年5月19日

学位記送られて来る。学位記の日付は五月六日。

16年10月15日

兄磐雄、帰國。

17年1月10日

國語の長母音について 日本諸學振興委員會研究報告第十二篇（國語國文學）

18年7月20日

金田一京助の『國語の變遷』、『辭苑』にみえる「普請」の説明に疑義を呈する手紙を書く。このころ、近所へ二、三丁位散歩に出かけるほどに回復。

17年1月〜2月初

金田一春彦、病床訪問。

- 昭和18年10月末 専門医の診察を受け、散歩をとめられる。
- 〃 19年6月8日 小倉進平博士還暦記念論文集に寄稿の「書史會要の『いろは』の音註について」校了となる。
- 〃 19年6月末 世田谷区三軒茶屋町八四へ転居。
- 〃 19年7月20日 『國語音韻史の研究』明世堂
- 〃 19年10月30日 正倉院御藏書鈔本蒙求の漢音 橋本博士
経曆 國語學論集 岩波書店
- 〃 20年2月初 肋膜炎の古傷が痛み出す。
- 〃 20年4月1日 強制疎開により世田谷区三軒茶屋町八六へ転居。病状思わしからず。
- 〃 25年8月5日 書史會要の「いろは」の音註について 言語研究第十六號(故小倉博士追悼號)
- 〃 26年7月5日 金田一京助を代表者として見舞金を募る。
- 〃 26年7月下旬 金田一京助ほか数名、見舞金をとどける。
- 〃 26年7月27日 母より金田一京助あてに礼状を出す。
- 〃 27年1月12日 『國語音韻史の研究』により学士院賞を授与されることの内定。
- 〃 27年1月25日 日本学士院長山田三良あて履歴書一通提出。自筆部分は署名のみ。
- 〃 27年2月12日 学士院賞授賞正式決定さる。
- 〃 27年2月16日 日本学士院長山田三良あて履歴書一通提出。自筆部分は署名のみ。
- 〃 27年3月13日 午前八時逝去(満四十三歳)。
- 〃 27年3月13日 ★ ★ ★ 通夜。
- 〃 27年3月13日 近親者で密葬。母より学士院長あて死亡通知書を提出。
- 〃 27年3月14日 有坂博士追悼会、有坂家からは兄愛彦が出席。
- 〃 27年4月3日 白山の浄土宗浄雲院心光寺に埋葬さる。
- 〃 27年4月30日 戒名は明了院教譽秀世居士。
- 〃 27年5月12日 学士院賞授賞式、兄愛彦代理で出席。
- 〃 27年6月15日 日本言語学会、国語学会、日本音声学会共催の故有坂博士追悼講演会(於東大法文経29番教室)。有坂家からは、母敏子、次兄光威二女愛子、三兄愛彦夫人富子の三名が出席。
- 〃 27年7月29日 書籍、ノート、原稿等、茶箱三つ、行李二つに詰めて金田一京助あて送る。(書

籍は後に東京学芸大学鈴木研究室で保管、ノートには「語勢沿革研究」(四冊)あり、原稿は後に『上代音韻放』と名づけらる。

昭和27年12月10日 萬葉假名字體 國語研究創刊號(國

學院大學國語研究會)

〃 28年5月30日 古辭書「和名集」について 金田一博士
古稀記念

言語・民俗論叢 三省堂

〃 30年7月25日 『上代音韻放』三省堂

〃 32年2月10日 母逝去(満八十歳)。

〃 32年10月10日 『國語音韻史の研究増補新版』三省堂

〃 34年5月5日 『音韻論増補版』三省堂

〃 39年11月1日 『語勢沿革研究』三省堂